

第 72 回 国際理解・国際協力・多文化共生のための高校生の主張コンクール東京都大会 特賞

筑波大学附属高等学校 1 年

藤澤 なずな

課題①

今年は国連創設 80 周年。分断や対立が深まる中、国連が国際社会の利益に応えるために必要なことは何か。

副題

国連が導くべき新たな旋律

もし世界中の人々が同じステージに立ち、それぞれの音を響かせたら、その演奏は美しい音楽になるでしょうか。それとも、ただの騒音になってしまうでしょうか。

私はドイツの留学中に、この問いの意味を深く考えるきっかけを得ました。

毎日慣れない環境、知らない言語、異なる国籍の人々に囲まれて孤立感を感じていたとき、現地の生徒たちと一緒に音楽を演奏する機会がありました。初めは言葉がうまく通じず、意思疎通ができないことに不安と緊張を感じました。しかし全員の音が重なった瞬間、今までの不安が一気に吹き飛びました。リズムを刻み、メロディーを重ねていくうちに不思議と心がつながっていく感覚があり、音楽は多種多様な私たちを結びつける共通の「ことば」となりました。この体験を通じて、同じ音を出すことや自分の音を一方的に響かせることではなく、それぞれの音の違いを活かして響きを合わせるからこそが調和なのだと気づきました。

このことは、国際社会にもそのまま当てはまるのではないのでしょうか。

国連憲章は八十年前、武力による威嚇や行使をやめ、対話と協力によって平和を築くことを世界に約束しました。以来、冷戦下でも、あるいは内戦や災害の現場でも、国連は不完全ながらも人道支援や平和維持活動を通じて人々を支えてきました。

しかし同時に、国連は限界も抱えています。安全保障理事会の拒否権はしばしば国際社会の動きを止めていますし、加盟国の利害が交錯し、合意形成に時間がかかることもあります。世界は今、気候変

動、紛争、難民問題といった、どこか一国だけでは解決できない課題に直面しているにも関わらず、各国が自国の主張を優先し、全体のハーモニーが乱れてしまう場面も少なくありません。

だからこそ、八十周年の節目に私たちが考えるべきことがあります。それは次の世代のために、どのような国連を残すかということです。

この八十年の歩みは、平和を守り、人権を支え、多くの制度を築いてきた歴史です。では次の八十年を築くものは何か。それは人々の心をつなぐ、文化の力だと私は考えています。

私が音楽を通じて学んだように、国連が果たすべき役割は、各国の声を一つに揃えることではありません。むしろ、互いに異なる声を尊重しながら、共通の響きを見出す「指揮者」であり続けることだと思います。そこに必要なのは、力の対立ではなく、対話を続ける粘り強さであり、互いの文化を理解しようとする姿勢です。

私たちにもできることがあります。身近なところから異なる文化に触れ、相手の声に耳を傾けること。それが積み重なれば、国連の舞台で奏でられるハーモニーは、もっと豊かで強いものになるはずです。

世界に散らばる多くの音を調和させること。その使命を担う国連とともに、私たちも未来を奏でていきましょう。